

〈特集補遺：まえがき〉

特集補遺：まえがき
Special Issue: Foreword

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001028>

1. これまでの経緯と今回（29号）での方針について

2009年に『語学研究所論集』（以下『語研論集』）の14号で「特集」が開始され23号まで、10のテーマに関する特集が行われてきた。その内容は、14号：受動表現、15号：アスペクト、16号：モダリティ、17号：ヴォイスとその周辺、18号：所有・存在表現、19号：他動性、20号：連用修飾的複文、21号：情報構造と名詞述語文、22号：情報標示の諸要素、23号：否定、形容詞と連体修飾複文、となっている（ただし、まだとりあげていない文法カテゴリー／文法現象も数多くある）。11年目～16年目（24号～本29号）では引き続き、これまでの特集でデータの得られていなかった言語の補遺を進めていくことを目指した。補遺の収集もすでに6年目ということになる。

2. 今回データが収集された言語とその意義

2.1. 対照研究や類型的研究、言語接触の研究にとって大きな意義を持つデータ

言語に優劣はなく、どの言語も唯一無二のものであって、どの言語のどのデータも他の何物にも代えがたいものであることは言うまでもない。ただ言語類型論的研究の観点からすると、やはり極めて大きな意義を持つデータというものはある。それは何より系統的に孤立した言語のデータである。系統的に孤立した言語のデータは、極端に言えば一語族に匹敵する価値がある。こうした状況において、今回バスク語の全データが揃ったことの意義は大きい。

次いで、系統的に孤立した言語でなくとも、これまで語族や語派について一つの言語のデータも得られていなかった語族や語派についての言語データが一つでも得られれば、それはこの『語研論集』データにとってきわめて貴重であり重要である。地域的にアクセスが難しい言語であったり、消滅の危機に瀕した言語で話し手があとわずかであったりすれば、その価値はさらに高い。

その観点からみて、今回得られたデータでも最も重要なものはシベリアのユカギール語、カムチャツカのイテリメン語であろう。両言語とも話者はあとわずかしか残っておらず、ロシア領内であるため現在現地調査は難しい状況にある。執筆者の方には過去に収集したデータや文献によりデータを作成していただいた。いわゆる「フィールド文献学」である。ユカギール語は「係り結び」を持つことから、日本語学や情報構造の研究にとっても、きわめて重要な言語である。系統的にはウラル語族やエスキモー・アリュート語族への帰属も問題にされてきた。両語族のミッシング・リンクである可能性もある。ただしその系統関係はまだ立証されたとはいえず、もちろん両語族の言語とも全く違った特徴を示すきわめてユニークな言語である。イテリメン語はチ



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

ユクチ・カムチャツカ語族の言語である蓋然性は高いとされているものの、この語族の他の言語とはさまざまな点で大きく異なっている。事実上の孤立語に等しい。多子音連続や斜格補語活用など、類型的に見てもきわめて興味深い言語である。地理的にも距離的にも（日本語を除けば）アイヌ語に最も近く、その目的語削除による自動詞化の接頭辞がアイヌ語のそれと形式・機能の両面で類似を示すなど、アイヌ語との関連でもっとも注目されている言語である。このような状況であるので、今後もユカギール語とイテリメン語の他の特集データを賜ることを切に願う。さらに今回も文献からデータを探す形でアイヌ語のモダリティのデータを賜った。今後もアイヌ語の他の特集データを賜ることを切に願う。

地域的観点からみてきわめて重要なのはパプアニューギニアのドム語と南米のアヤクーチョ・ケチュア語、カラコルム山中のドマーキ語である。パプアニューギニアと南米の言語のデータはこれまで『語研論集』には一言語（メエゴ）のデータがあっただけで、毎度のようにこの「まえがき」で課題としていたいわば悲願であった。パプアニューギニアには800を超える言語があり、語族だけでも数十を数える。しかしほとんど無文字言語であり熟練した言語研究者でなければ記述はできない。言語学全体の記述の枠組みにも大きな影響を与えた medial verb をはじめ、パプアニューギニア独自の重要な言語特徴は多い。今回得られたドム語は声調言語であり、その動詞連続を多用する諸表現は大変に興味深い。アヤクーチョ・ケチュア語をはじめとするケチュア語は接尾辞型の言語で、格を持ち動詞複合体を形成するなどの点で日本語などいわゆるアルタイ型の文法を持つ言語ともよく似ていると言われている。語順は語族内の言語によって異なるが、SOV 語順の言語も多く、アヤクーチョ・ケチュア語もデータを見る限りではSOVになっている。動詞の体言化や指示転換(Switch reference)も今回のデータに現れており、類型的に大変興味深い。今後もドム語とアヤクーチョ・ケチュア語の他の特集データを賜ることを切に願う。

上記のようにパプアニューギニアは言語研究者にとってきわめて重要な地域であるが、ここでのリング・フランカはトク・ピシンである。今回そのデータ全部を賜った。クレオール言語のデータとしてこのデータはまきわめて貴重であるが、今後ニューギニアの言語を調査し特集データを収集する際に、媒介言語の調査票としてトク・ピシンのデータがそろっていることはきわめて大きな役割を果たすことだろう。

ドラヴィダ語族の言語として初めて、ブラーフイー語のデータを賜ったこともきわめて貴重である。ドラヴィダ語族の言語は、いわゆるアルタイ型の言語類型を持ち、日本語の類型の研究にとってもきわめて重要な言語群である。ブラーフイー語はドラヴィダ語族の中では他のドラヴィダ諸語から遠く離れたパキスタンに位置し、その性格もユニークである。言語接触の観点からも貴重なデータであると考えられる。

今回初めてアラビア語以外のアフロ・アジア語族の言語データとしてエチオピアで話されるオモ系のウォライタ語のデータを賜ったことも重要である。アフロ・アジア語族も大語族であり、アフリカの四大語族（ここではいったん旧コイサンを一つとしておく）であるのに、これまでそのデータはアラビア語のものしかなかった。エチオピアもSOV言語がアフリカではここに限って多いなど言語類型的に見て重要な地域である。

2.2. 語族内での変異や歴史、さらには語族全体の特性を解明していくために重要な意義を持つデータ

上記以外で、今号の収集言語データで多く賜ったのは、アフリカのニジェール・コンゴ語族のバントゥー諸語（11言語：スワヒリ語、ベンダ語、ニャキュサ語、ツォンガ語、スワティ語、ツァナ語、北ソト語、南ソト語、コーサ語、ズールー語、ンデベレ語）、同じくニジェール・コンゴ語族だが大西洋諸語のウォロフ語、漢語諸方言（5方言：赤壁方言、成都方言、新疆方言、武漢方言、柳州方言）、チベット・ビルマ語派の言語（4言語：ジンポー語、カム・チベット語塔公方言、チョネ・チベット語扎古録方言、アムド・チベット語）である。

上記の諸言語はいずれもかなり大きな語族の言語である。したがって語族全体からみれば今回までに得られたデータの量はまだまだその中でのほんのわずかであり、語族内での変異や歴史、さらには語族全体の特性を解明していく道のりはまだまだ遠い。しかし、その一方で上記のような充実した研究者たちの力により、少

しずつではあっても今後も着実に蓄積が進んで行くことを十分に期待することができる。

今回賜ったバントゥー諸語のデータの中には，南部に位置し，コイサンとの接触から吸着音を持つ言語も少なからずある（上記のスワティ語以下の7言語）。本特集にはすでにグイ語やガナ語のデータもあるので，南アフリカにおける言語接触の研究にも役立つことも期待される。品川先生のお力で多くのバントゥー諸語の言語データが集積されてきていることに深く感謝したい。

バントゥーの中でもっともよく知られたスワヒリ語のデータを5特集分賜ったことも大きい。本学にはアフリカ地域の学生を中心に，スワヒリ語に興味を持つ学生も多い。スワヒリ語にはバントゥー諸語研究の入り口としての重要な価値がある。引き続き来年度にもデータを賜りやがて全特集が集まれば，さらに大きな意義があり，今後アフリカの一部の地域では媒介言語の調査票としての利用も期待できるだろう。今回賜ったバントゥー諸語のデータの大部分はもっぱら受動表現の特集であるが，今後も他の特集データを賜ることを切に願う。ニジェール・コンゴ語族が大西洋諸語のウォロフ語のデータも貴重である。ニジェール・コンゴ語族でもバントゥーでない西アフリカや中央アフリカの言語には，孤立型の言語や特徴的な声調体系をもった言語が多く存在する。東南アジア大陸部の孤立型言語との対照や，声調言語の研究のために，今後もぜひこの地域の言語データを賜ることを切に願う。

日本では特に京都大学の故西田龍雄先生，もしくはそれ以前からの伝統により，チベット・ビルマ語派について多くの研究者による精力的な研究がなされてきている。今回もその恩恵を受け，多くのデータを賜った。惜しむらくはやはり依然としてラサのチベット語のデータが欠けていることだろう。ジンポー語はチベット・ビルマ諸語研究においてリンカーとも言われる重要な言語である。したがってラサ・チベット語，ビルマ語（すでに全特集のデータがある），ジンポー語のデータが揃い，これらを三つの基準点としつつ他の諸言語を対照する時，チベット・ビルマ語派の研究がより一層実りあるものになっていくのではないかと考える。

漢語諸方言については静岡大学の張盛開先生を中心に，多くのデータを集めていただいている。中国では北京官話への統一への動きが強まっていて，少数民族言語や方言の研究は軽視されているものと思われる。その点で日本で漢語諸方言の研究が進むことには意味があるだろう。今回賜ったデータはもっぱら官話系のものであり，普通話との違いはそれほど大きくないようではあるが，官話内部でのバリエーションとその広がりが見解されることもたいへん重要なことであると思う。今後さらにいわゆる七大方言についてのデータが集積されて行くことを望む。

今回は他にスロヴェニア語 (10)，アフリカーンス語 (1)，リトアニア語 (1)，土族語民和方言 (1)，マラーティー語 (5)，アゼルバイジャン語 (5) のデータを賜った (() 内は特集の数を示す)。マラーティー語のデータはこれで全特集分が揃い，ヒンディーやウルドゥーとの全面的な対照が可能になった。インド諸言語の研究の進展することを願う。スロヴェニア語は双数形を残しているなど，スラブ諸語の中でも西南部に位置し興味深い言語である。スラブ諸語のデータに関しては，さらにセルビア語などバルカン半島中央部の言語のデータがあればより全面的な対照が可能になるだろう。来年度はラトヴィア語のデータをいただける予定があり，リトアニア語のデータの蓄積と相まって，バルト諸語のデータが完備することも期待したい。言語接触にも重要な知見をもたらすものとしてアフリカーンス語のデータが貴重であることは言うまでもない。

トルコ語とトルクメン語のデータが揃っており，今回でアゼルバイジャン語のデータは6となったので，チュルク語族のオグズ語群のデータは充実したものとなって来た。残る4特集分のデータが待たれる。土族語民和方言は初のシロンゴル・モンゴル諸語のデータである。シロンゴル・モンゴル諸語とは甘粛省や青海省に分布するモンゴル諸語で，モンゴル語の古い特徴をいくつか保っている貴重な言語群である。今後もシロンゴル・モンゴル諸語の研究が進展することを期待したい。

2.3. 日本語諸方言への展開

前々号で初めて大阪方言の全10特集分のデータを賜り，前号では山梨県奈良田方言，九州柳川方言のデー

タを賜った。前号では「今後は琉球諸方言や八丈島のデータが得られないか、その可能性を探っていききたい」と書いた。そしてありがたいことに今号では念願の北琉球奄美大島浦方言のデータを初めて賜った。貴重な方言の島である山梨県奈良田方言のデータも全 10 特集分が揃った。播磨方言についても、鋭い言語学的な洞察を多く含んだ貴重なデータを全 10 特集分賜った。マスコミや交通の発達や社会の変化に伴い、貴重な日本語諸方言もどんどん姿を消しつつある。日本語諸方言も消滅の危機に瀕した言語であり、その記録は急務である。今後もさらに南琉球語などをはじめ貴重な諸方言のデータが集積されて行くことを望む。

3. データの活用に関する報告

昨年 (2024 年) 11 月 12 日に北海道大学で行われた日本言語学会第 169 回大会において、小林剛士、宮川寛人、小林颯、石橋雄大の 4 名にコメンテーターとして本稿執筆者の風間が参加し、「全体・部分・動詞の三角関係標示のストラテジー」というタイトルでワークショップを行った。そこでは『語研論集』特集データを活用した分析が提示された。各人の発表テーマは次の通りである：小林剛士「三角関係標示の広域類型論」、宮川寛人「アラビア諸語における三角関係標示の変異と歴史」、小林颯「南アジアの言語における三角関係標示の超系統的傾向」、石橋雄大「ヨーロッパ諸言語における三角関係標示とその要因」。なおその内容は論文化・刊行し、『思言』20: 301-342 として HP でも公開しているので、詳細はそちらを御覧いただきたい。このように収集しつつある語研特集のデータも、言語間の対照や類型論的な分析・考察に活用しなければ意味がないと思う。欧米では WALS や Grambank がすでに作成され活用されている。それらに対し、またそれらと併用して、本特集データもその長所を生かしてこれを活用するとともに、その長所短所をさらに明らかにし、場合によっては修正を加えていくことが必要であると考えている。

一方、ネット上でのアクセスが容易なデータベースの整備にも力を入れて、これを進めていきたいと考えている。特集データのデータベースも語研の HP で公開しているが、まだ全年度分のデータが公開できているわけでもない。英語でアクセスできるようにすることも喫緊の最重要課題であると考えている。

4. 今後の目標

方言として数えられているものを含め、現時点で (最低 1 特集でも) 収集された言語の総数は 126 である。前号より 28 言語増えた。今後も少しずつであっても地道にこれを増やしていくことを目標としたい。前々号の「まえがき」では「5 年後には 300, 10 年後には 600 言語を目指す」と述べたが、こうした数字はやはりそう簡単に達成できるものではなく、300 言語へもなお遠い道のりである。特に北米と (北東/北中/北西) コーカサスの諸言語、オーストラリア先住民の諸言語に関してのデータは未だに皆無である。今後も多くの個別言語の研究者の方々のご協力を賜りたい。何卒ご理解とご協力をいただければ幸いである。以上でこの「まえがき」の筆を置く。読者からの御教示、御批判御叱正等をいただければこれも幸いである。

連絡・問い合わせ先 : kazamas@tufs.ac.jp, ilr419@tufs.ac.jp

謝辞

今回、データを作成・提供して下さった先生方、ならびにそのコンサルタントとなって下さった話者の方々に深くお礼申し上げたい。特に本学以外の他の機関に所属されている先生方で、本特集のデータ収集の意義に御理解を示して下さい、データを作成・提供して下さった先生方に深くお礼申し上げる。上記の「まえがき」本文に、それぞれの言語と共にそのお名前をあげてお礼を申し上げたかったが、筆者が直接に依頼した先生方と、間接的に依頼した先生方との間などで、筆者の言及の仕方の度合いが違ったり、不平等・不統一になったりすることを恐れ、あえて記すことはしなかった。ここに一括してお名前を挙げずに謝辞を記すことをお許し願いたい。多くの言語データの収集のため、お声かけ下さった品川先生と張先生には特に本文中でお名前を出

させていただいたが，ここに重ねて感謝申し上げたい。